

「小さな先生」たちが教えてくれること

1月が終わり、日差しが少しずつ力強くなっていくのを感じるとともに、新しい季節の足音が聞こえてくるようです。

この時期、園内では寒さを吹き飛ばすような、とても温かい光景に何度も出会います。

それは、子ども達の間に自然と生まれている「優しさの連鎖」です。

園として大切にしている異年齢保育（0・1歳児、2歳児、3・4・5歳児の3クラス構成）の中では、大人が教え込むのではなく、子ども同士が関わり合う中で育つ姿が、日常の中に溶け込んでいます。

2階のハニー・3・4・5歳児が集うマジョラムクラスでは、外遊びに行こうとする時、年上の子が年下の子の前にそっと膝をつき、上着のジッパーを懸命に閉めてあげている姿を見かけます。年下の子は身を委ねて、年上の子は少し誇らしげな表情を浮かべています。そこには、言葉を超えた「信頼」と「憧れ」が流れています。



マミー・2歳児のメリッサクラスでは、誰かが涙を流していると、どこからともなくティッシュを持ってきて、渡してくれる子がいます。

また0・1歳児のカモミールクラスであっても、泣いている子の隣に寄り添い、小さな手で優しく「なでなで」してあげる姿があります。「どうしたの?」「大丈夫だよ」という気持ちが、その温かな手から伝わっているのでしょう。

こうした光景を見るたびに、私は「子どもの一番の先生は子どもだ」と実感します。

ただその前に、私達大人の関りが子どもの心に優しさを植えるのだ、とも思います。

子どもは、してもらったことを、その通りに周りの人に返します。

つまり全ては「マネ（模倣）」から始まります。

大人が「優しくしなさい」と指示を出すのは簡単ですが、たくさん優しくして貰った経験があればこそ、人にも出来ます。

そう考えると私達大人の、人に対する礼儀や言葉かけ、立ち居振る舞いなど改めて意識することは大切ですね。

年上の子の振る舞いを見て育った年下の子は、自分が大きくなった時、同じように自然と手を差し伸べるようになります。

こうして優しさは、バトンのように次の世代へと受け継がれていくのです。

自分のことだけでなく、誰かのために心と体を動かせるようになった子ども達。

その姿は、この一年間、園という小さな社会の中で、多様な個性が混ざり合いながら過ごしてきた日々が、確かな「心の育ち」に繋がっていることを教えてくれています。



進級・進学まで残りわずかな期間となりました。

これからも私達は、子ども同士の自然な関り【見て学び・して学び・教えて学ぶ】という子どもの成長を見守り、安心して自分らしさを発揮できる環境を整えていきます。

ご家庭でも子どもが見せた小さな「優しさ」の兆しを、一緒に喜んでいただければと思います。

（我妻）